

西照

西照寺々報 “さいしょう”

第1号

1985年11月1日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

「南無阿弥陀佛」の六文字

吉田秀義

ある日、能町小学校の保健室で予防注射をしていました。そこへ、野村校下の保育園児が「私にも予防注射をして下さい。」とやってきました。お母さんに「野村校下は〇月〇日これからですよ。」と教えますと「わかっています。でも先生、その日は丁度、スイミングスクールがあり、そちらの方に行きたいのです。」と返事がかえってきました。

そこで私は、「お母さん、それは間違っているのではないですか。予防注射は法律で定められた必要なことですよ。スイミングスクールは貴女のしたことですから、先ず、必要なことを優先させて下さい。欲望を優先させてはいけません。それが賢いですよ。」と説明しましたら素早く理解され、「先生、いいことを教えていただきました。本当に気がつかず、有難う御座居ました。」と子供を説得して注射を受けずに帰っていききました。

最近の日本は三つの放題があると言われています。

この三つの放題とは、言いたい放題、食べたい放題、したい放題ですが、その目的は得する、楽する、カッコよくするということ得快・美を目指しているといえます。

自由とは、責任と一対のもので、責任のない自由は、自由奔走になります。義務よりも権利を主張し、人よりも得することによって優越感を満喫し、好きなものを飲んだり食べたりで肥満やアルコール依存症を生じ、これが糖尿病や肝硬変症、高血圧症等の病気の元を作っています。又、自分や自分の一族或は、自分の町や会社だけによければよいという自己中心的な自恋（我）の強

い人間ばかり出来あがると家族や学校、職場、社会人等の人間の集まる場では感情の衝突をすぐ引き起こし、うつ病や心身症が多発してまいります。現代は物で榮えて心で減る文明の曲り角の時代で今ほど、南無阿弥陀佛の信心の心が必要な時はないのではないのでしょうか。

阿弥陀とは、あみだくじにも表現されるように誰でも自由平等であるという教えです。

仏とは、インド古代語（梵語）の「ブツタ Buddha」の発音をそのまま写しとったものと言われ、自由平等のセルフコントロール（自分で物慾、色慾、自慾をコントロール出来る心）を意味しています。人は誰もみな同じで差別をしない心は、蓮如上人の「同朋」の考え方であり、親鸞の「我、終生弟子を作らず、即ち、弟子を作れば私はその人の上に立たなければならぬ。信ずる宗教はそうではないのですよ。お念仏を唱える信心の意志があれば私と共に信じましょう。信心の心は貴方の意志で選ぶのですよ。」と自分の考え方を押しつけていません。

人は自分の心の升で相手を計るといわれています。自分の升で計れないこぼれたものを拾ったりはしにくいです。まして、最初から計れないものは受け入れようとはしません。だんだん増え続ける人間。沢山の人間の考え方が一緒であらうはずはありません。今こそ阿弥陀の心で老若男女を問わず、善悪、強弱、病氣等全てお互いに吸取紙のように吸い取り合って感謝の気持ちで「南無阿弥陀佛」と南無阿弥陀佛の六文字の心を正しく理解し、空念佛にしないようにお念仏の心に共感して信心をわかち合いたいものだと言頃、念じています。

合掌
（吉田医院々長・西照寺責任役員）

ひかり来たりにて

— 仏陀の出現 —

(1) 人間であることの目覚め

岡 西 法 英

仏教の開祖は釈尊と呼ばれる方です。もとの名をゴータマ・シッタールタといいます。今から二千五百年ほど前に、今の地図でいえばインドとネパールの国境の付近にあったカピラ国という小さな国の王子としてお生まれになりました。

ヒマラヤ山脈のふもと、ガンジス川の中流域にあったこの国は、釈迦族と呼ぶ部族の国でありました。「お釈迦さま」という呼び名は、出身部族の名であるわけです。

東西二十里、南北十五里といいますが、富山県よりほんの少し大きいぐらいの小国で、西隣りにあった大国コーサラの半属国であったようです。

釈迦族は政治的には弱小でしたが、彼らの古い家系を誇りとし、武勇にすぐれ、肥えた土地柄に恵まれて豊かな暮らしをしていました。各村や町ごとに王がおり、それらの王たちが会議の上で国王を選ぶという国政のしくみであったようです。

釈尊は国王シンドーダナ王の太子としてお生まれになりました。母后の名はマヤ夫人と伝えられています。後に出家して修行の旅に出、^{「さとり」}をお開きになってからは、^{「釈迦牟尼仏」}釈迦族出身の聖者(牟尼)である目覚めたるお方(仏陀)という意味とか、世尊(幸せな方)と

か、如来(真理の具現者)と呼ばれました。よく用いられる「釈尊」という呼び名も「釈迦牟尼世尊」の略称とみられます。

小国とはいえ、一國の皇太子でありましたから、シッタールタ太子は何足ない快適な環境の中でお育ちになりました。

身につける衣類はすべてカーシー(今のベナレス)産の最高級品であり、食事はといえば、この王家の下男下女に至るまでが、白い飯と肉のおかずを与えられていたという豊かさであり、住居についても、太子一人のために、冬用、夏用、雨期用の三つの宮殿があったと伝えられています。

それ程に恵まれた生活をしておられた青年太子が、何故、後には国を棄て家を捨て妻子も財宝も安穩な生活をもなげすめて、求道の旅に出られたのでしょうか。それは、人間である以上誰しも避けて通ることのできない根本問題についての目覚めと、それ故の深い悩みがあったからであるといえます。

「わたしはこのように裕福で、このように極めて快くあったけれども、このような思いが起った。——無学なる凡夫は、みずから老いゆくもので、同様に老いるのを免れないのに、老衰した他人を見て、考え込んで、悩み、恥じ、嫌悪している。われもまた老いゆくもので、老いるのを免れない。自分こそ老いゆくもので、同様に老いるのを免れないのに、老衰した他人を見ては悩み、恥じ、嫌悪するであろう。——このことはわたくしにはふさわしくない、と言って。わたくしがこのように観察したとき、青年時における青年の意気は全く消え失せてしまった。

無学な凡夫は、みずから病むもので、同様に病いを免れないのに病んでいる他人を見ては——中略——。このように観察したとき、健康時に於ける健康の意気は全く消え失せてしまった。

無学な凡夫は、みずから死ぬもので、同様に死を免れないのに死んだ他人を見て——中略——このように観察したとき、生存時における生存の意気は全く消え失せてしまった』（中阿含経第二十九卷——中村元訳による）

これは後に釈尊が若き日を回想して述べられた言葉です。

その生活が他の人と比較していかに豊かで快適であろうと、またなかろうと、それ以前の問題として、人間である以上は誰しも免れることのできない「老」「病」「死」の身であるという厳然たる事実の重大さを目を開かれたことが述べられています。

他人の老衰した姿、病み苦しむ姿、死にゆく姿を見て、「自分自身もあのようになるのだろうか」、「あのようにになったらどうしよう」、「あのようにはなりたくない」と、悩み、恥じ、嫌悪する事は、実はそのまま、同じように老い、病み、死んでゆかねばならない自分自身のゆくすえを呪うことを意味するものであり、それを免れることのできない我とわが身を呪うことに他なりません。

この身、この命そのものに苦悩せねばならないのが愚かな人間の偽わらざるすがたである。いや私自身のすがたであると気付いた時、自己の生き方や生きることの意味の全体が重い問いとなって迫ってまいります。「私の生き方はこれでよいのだろうか。いやどこかで根本的に間違っているのではないか」、「一体私は何のために生れ、何のために生きているのであろうか」、「やがては失われねばならぬものを追い求めるためにであらうか」と自らに問わずにはおれません。いままでは、よろこびとしてきた、財宝も名譽も家庭も、快適な生活も、自分自身の老いと病いと死が、それらを楽しむことができないうようにしてゆくこと、若さも健康もいや生存そのものすら、失われるに間違いないものでしかないことが知

らされます。このことに思いを至すとき、財宝も地位も名譽も家庭も、若さも健康も長寿も、私の宝ではない、支えにはならない、たよりにならない、求めてたとえ得たとしても、やがて失う不安と、失われゆく苦しみと、失った悲しみ、空しさを免れることはできないということが知らされ、不安の暗闇の中に素っ裸かで一人さまよう。自己の真相が見えてきます。

釈尊の若き日の悩みは、まさに「人間であること」が、「老病死の存在であること」であり、「老病死に苦悩しないではいられない存在であること」であるという事実への目覚めであった。「人間であること」の目覚めであったということができましよう。

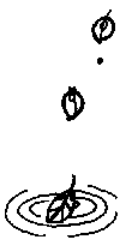
この目覚めは、時代や場所の違いを越えてあらゆる人間に開かれた目覚めです。シッダールタ太子個人の目覚めでありながら、「人間の目覚め」、「人類の目覚め」であるという意味をもちます。私達一人一人の目覚めが太子の目覚めに於いて約束されているともいえましよう。

シッダールタ太子はやがて、国を捨て、家を捨て、妻子を捨てて「出家」されます。

「比丘らよ、わたくしは実に『道を求める心を起こして』のちに、まだ若い青年であつて漆黒の髪あり、楽しい青春にみちていたけれども、人生の春に、父母が欲せず顔に涙を浮べて泣いていたのに、髪と鬚を剃り落して、袈裟衣をつけて、家を出て出家行者となった』（中阿含経五十六卷——中村元訳）

この時、太子二十九才、家には若い妻と生れて間もない一子ラーフラが残されたのでした。ずっと後になりますが、母も妻も子も、出家して、すでに仏陀となりたもうた釈尊の弟子になることになります。

(つづく)



浄土真宗よろず心得

葬儀

一、浄土真宗の葬儀とは

浄土真宗に於ける葬儀とは、亡き人に永遠の別れを告げる告別の儀式ではなく、み仏のはからいにより、再び会えるお浄土への思いを確かめあう儀式です。悲しみを機縁に、人生に於ける私の生と死を見つめ、仏法にあわせて頂く大切な場であります。

ところで、葬式や法事など、特に、死者をとむらう行事には、さまざまの「迷信」がつきものです。「迷信」は、それにこだわらない人には、無いに等しいものと言えますが、こだわる人にとっては、大きな力を持っています。つまり、「迷信」がはたらきを持つのは、その人の心の中に「迷心」（迷いごころ）があるからであって、その意味では、「私」はそんなものにこだわらないが、他の人たちが気にするから」といって、結局は「迷信」に従ってしまうのも、「迷いごころ」のひとつだと言わねばなりません。

従来から、葬式や法事などを、私たちは、「仏教の行事」（仏事）として行なってきましたが、それは、まず第一に、仏の教えによって、私たちがそのような「迷心」をはなれて正しい「信心」にむかうということが、最も大切なこととしてあるからです。

ですから、浄土真宗では、仏事は亡き人のためではなく、私達自身が「迷心」をはなれて「信心」にむかうという法縁を深めるためのものであります。亡き人が迷っているのではありません。生きているこの私が人生の方向に迷っているのではないかと、目覚めさせて頂くところに、仏様の仕事に遇うということがあるわけです。

親鸞聖人は、亡き両親の追善供養として念仏を称えたことは、今まで一度もないと、厳しくご自身を戒めておられます。（歎異抄）それは、お念仏のお徳によってお浄土に往生されて、仏となられた方に対しては、まさら何をしむける（追善）必要があるのか、ということです。聖人は、亡き両親への追慕の念を否定されたのではなく、その心情により、自己中心的な思いのうえにたつ追善ということの欺瞞性に気づかれ、絶対他力の信心の世界へと目覚めていかれたのであります。

二、臨終から拾骨まで

(1) 遺体の安置と仏前莊嚴

亡くなられたら、まず、お仏壇に灯明をあげ、香をたきます。花は櫛か青木のもので取り替えます。遺体はお仏壇の近くに移します。また、仏間以外の部屋に遺体を安置する場合は、適切な場所にご本尊をおかけし、尊前に卓置き、三具足（向って右から、ろうそく立て、香炉、花瓶）で莊嚴します。遺体は顔を白布で覆い、釈尊の入滅にならって、北枕（顔北面西右脇）のまま合掌し、平素から使用していた門徒式章と念珠をかけます。しかし、部屋の都合により、決して北枕にこだわることはありません。遺体の前には、一切の莊嚴はしないのがたてまえです。莊嚴をする場合は、ご本尊をおかけします。（尚、習慣として、枕もとに、卓や白い布で覆った台をおき三具足をおく場合が多いようです。）

（つづく）

（以上、高岡教区発行「浄土真宗葬儀よろず心得」、並びに、常願寺発行「共同心」の文章を一部変更して引用しました。）



西照寺行事案内

十一月十五日昼席
（午後二時）

十一月十六日昼席まで
報恩講

十一月二十七日昼席

大谷派（お東）
御正忌 報恩講

一月一日 午前五時

二月 午前六時

三日 午前六時

修正会（元日会）

一月十五日朝席（午前九時）

御正忌（報恩講）
十六日昼席

三月二十二日昼席

春季（祠堂）永代経
二十四日昼席

お誘い合わせの上、
ご参詣下さいませ。